

浦賀文化

会津藩と浦賀

文化七年(一八一〇年)、幕府の命により江戸湾を警備することとなった会津藩は、一家をあげて三浦半島へ移住してきました。そのため、鴨居周辺には会津藩士とその家族の墓が、数多く残されています。

東北の福島県地方の春は遅く、雪解け水のせせらぎに招かれるかのように、梅と桃、そして桜の花が一斉に咲きほこります。このことから福島県には三春地方という地名も生まれたといえます。さて、寒かった冬も一息ついて、ようやく春の訪れを感じる頃となりました。

今年、平成十七年四月十七日に、横須賀市が福島県会津若松市と友好都市の提携をしてから十周年という節目の年になります。今回は、両市が提携を結ぶきっかけとなった出来事をご紹介します。

福島県会津地方と三浦半島との関わりは長く、古くは鎌倉時代の初期に遡ります。武士による初めての政権である鎌倉幕府を開いた源頼朝が壇ノ浦の合戦(寿永四年・一一八五年)で平氏を滅亡させた後、文治五年(一一八九年)に東北地方で栄華を誇っていた藤原氏を平定するために兵を挙げました。遠く岩手・平泉の地に遠征しての藤原一族平定の成功の裏には、三浦一族の活躍もあり

ました。このいくさに功績をあげた三浦(佐原)義連に対して、源頼朝は恩賞として陸奥国会津の四郡(会津、大沼、河沼、耶麻)を領地として与えました。その後、宝治合戦(宝治元年・一二四七年)において、三浦氏は宿敵である北条氏に滅ぼされてしまいました。しかし、北条氏の側について生き延びた佐原一族の子孫が会津に入って葦名氏を名乗りました。この葦名氏は、初代葦名光盛から戦国時代に伊達政宗に滅ぼされるまでの四百年にわたり会津地方の支配を続けました。

葦名氏の血を引く一族にとり、義連の菩提寺である横須賀市岩戸の満願寺は、今なお祖先ゆかりの地と考えられています。

時代は下ること六百年あまりを経た十九世紀、江戸時代の後期に入ると、中国や東南アジアの沿岸には西洋諸国の船が訪れるようになり、いわゆる欧米列強のアジア進出による外圧がわが国にも及んできたのです。浦賀の沖に現れた外国船から、薪や水、

食糧などを要求される事態に遭遇するようになりました。幕府は、三代将軍徳川家光の時代から祖法としての鎖国政策を守り続けてきましたが、世界情勢が急展開する中、日本の沿岸に海防の必要性が唱えられるようになりました。首都の入口に位置する三浦半島の重要性が増すにつれて、幕府は文化七年(一八一〇年)から約十年間にわたり会津藩に沿岸防備を命じました。

雪深い山国の会津地方から、最も多い時で二千名に及ぶ藩士とその家族が三浦半島に派遣されてきたといえます。会津藩の手により観音崎と三崎に陣屋が設けられました。全く環境の異なる海沿いの防備を任された会津の人たちは、慣れない土地に来て言葉の違いや船の操縦など四苦八苦の連続だったに違いありません。

そのころ三浦半島に来ていた会津藩の人々は子弟に教育を施すための学校を設けていました。学校は鴨居と三崎にありました。鴨居の学校を養正館と呼んでいました。会津に復元された旧藩校の日新館の様子から想像すると、武道の訓練のほか、四書五経といわれる中国古典や会津地方で重んじられてきた「仕の掟」という徳目が教えられていたものと思われれます。「仕の掟」という徳目は会津若松市内の所々に掲示され

ており、現代の私たちにも目にすることができます。

こうした会津と三浦半島の歴史をひもとく中から、会津若松市に根付いてきた伝統文化を学ぶとともに、横須賀市浦賀地域の文化を発信し、お互いの交流の中から生まれる友好関係を実りあるものにしていきたいものと考えます。

「あいづっこ宣言」現代版仕の掟

- 一 人をいたわります
 - 二 ありがとう
 - 三 ごめんなさいを言います
 - 四 がまんをします
 - 五 卑怯なふるまいをしません
 - 六 会津を誇り年上を敬います
- 夢に向かってがんばります
やっつてはならぬ
やらねばならぬ
ならぬことば
ならぬものです



会津藩士墓地 (鴨居腰越)



歴史 語りい座・浦賀 四十一

郷土史家 山本 詔一



●『近世浦賀崎人伝』△●

—吉崎 杉調—

杉調は子どもの時の名を留蔵とい
い、その後宗助・宗四郎と改めてい
る。吉崎氏は東浦賀村では年寄役の
家格であるが、崎人伝の文中ではそ
れらしき紹介はない。

お酒を嗜むことが好きであるが酔
つて乱れるようなことはない。大変
な力持ちで将棋盤を右手で持ち上げ
左手で扇を使ったり、また将棋盤を
持ち上げておいて、持ち上げた盤へ
駒を並べることができてしまうほど
の血気盛んな怪力の持ち主であった。

一方、俳諧を好みこの時代の雪中
庵（大島）寥太の門人で、小田原を
中心に活躍していた葎雪庵（岩波）
午心に師事というよりは追っかけに
近いほどのめり込んでいた。俳号を
寿客と改めたところがあるが前の俳号は不
詳である。

若くして病に侵され、これが不治
の病であることを知ると、この世に
未練をのこさず、心たくましく念仏
を唱える日々を送っていた。ある日、
俳諧仲間でもある友人の斎藤練之と
幸保定虎（この二人はこの後「崎人
伝」に登場する）らが見舞いにくる
と「今日申の刻（午後4時ころ）に
生涯を閉じることになる」と言い、
今生の別れまで酒をと、お膳を用意

させて盃を傾け続け、酔いがまわる
程になったが、生涯を閉じること
はなかった。すると「今日は死にいた
ることはない」と言い放つて、「また
今度来てくれ」と客を帰した。

また、茶事を好む田村時調が見舞
いに来たときにも酒肴を用意し、熱
心に俳諧の話をした。その中で、時
調が死に臨み辞世の句を怠らないよ
うにと励ました。杉調は拙きものを
残さないのも甲斐性と笑い、これま
でに作った句の中から自選した三十
句を短冊にと、筆を執って二十五葉
まできた時に絶命した。その時刻は
申の刻であった。

まことに壮年期に心穏やかにすべ
てを成し遂げた感があるのは、平生
からの信を守り、義を行う強い心根
があったからであろう。法名は俳号
から寿客居士という。享年三十一才。

—宮原 阿久—

阿久は東浦賀でも最大の干鯛問
屋・宮原屋次兵衛の息子であり、「崎
人伝」に掲載された人物の中でもつ
とも若くし十六才で世を去った。

子どものころは久米松といい、宮
原屋の本店がある紀伊国宮原（現在
の和歌山県有田市宮原）で、三代次
兵衛（この人もこの後「崎人伝」に
宮原石二として登場）の子として生
まれた。

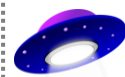
江戸時代初期に隆盛を誇った浦賀
の干鯛問屋も十八世紀に入ると陰り
が見え、世代交代が行われていった。
こうした時期に浦賀へ進出してきた
のが、紀州の商人であった。宮原屋
次兵衛は「宮次」、宮原屋与右衛門は
「宮与」と呼ばれ、東浦賀の干鯛問
屋の二代巨頭であるとともに、東浦
賀で事あるときには必ず両宮原屋の
意向が尊重されるほど力を持つまで
に成長していた。

阿久は子どものころから秀でた存
在で、中国の故事にある「孔融梨を
譲る」（「崎人伝」では棗になっ
て）の孔融にも負けぬ聡明さであっ
た。七、八才から書を好み、特にこ
の時代を代表する書家で儒学者、洒
落本作家でもあった東江（沢田）源
鱗から中国の蘇東坡（蘇軾ともい
い宋時代を代表する書家・詩人）まで興
味を広げていった。十六才で浦賀へ
来て、江戸時代を代表する漢詩人・
大窪詩佛に巡り合い、文から書へと、
その才能を伸ばしていくところで、
亡くなってしまった。惜しいこと
であった。

後年浦賀を訪れた大窪詩佛は彼の
ために追悼の書を認めた。



笑話 一題



光り輝くUFOの正体、
あなたは何を感じますか。
（れなママ）

謎の「UFO」
「光の尾を引く隕石？」
これまでUFOは、世界中の空で目撃されて
きました。北米の目撃例が多く報じられてきた
なか、最近の情報によると、中南米での目撃が
頻繁になっていくことが分かっています。
動画で見ると、光の尾を引きながら空中
を移動する姿は、隕石のように見えます。また
は、別の自然現象なのでしょうか。
一方、光の尾ではなく、鮮やかな輪郭をもって
出現する飛行物体の姿は、UFOの存在を確信
せざるを得ません。

～俳句の散歩道～

意地とほす木鶏蝦夷に散るさくら
遊球子
春をかぐ浦賀湊に黄水仙
中川ミツ

※当館に投句箱を設置しました。浦賀にちなんだ俳句を募集しています。ご投句お待ちしております。

横須賀製鉄所（造船所）創設 150 周年記念事業

ヨコスカ開国物語

～日本近代幕開けは横須賀から始まった～

日本近代化の基礎をつくった
横須賀製鉄所（造船所）の歴史
を基礎から学ぶ講座です。講師
は山本詔一さん。

5/29、6/5・12・19・26（全5回）
【毎回金曜日 13:30～15:30】
浦賀コミュニティセンター分館

詳細、お申込み方法は「広報
よこすか」「浦賀TODAY」を
ご覧ください。

浦賀文化のバックナンバーがご覧いただけます

(<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2490/uragabunka/>)